學窓を出でて祖廟に參籠し「本化門下」の使命を思ふ

立て！三百萬の信徒よ、一心一体、祖廟に馳せ參じて身延川の清流に塵穢を洗ひ清め、頭に高祖大師を戴きて、第二立正安國運動を起せ。

三百萬一心一体となつて國家諫暁をなしたならば「勅宣並びに御教書を申し下して」『世界第一の本尊此の國に立つ』ことは眼前にあるのである、何となれば後五百歳廣宣流布の鍵は靈山會上に於て釋尊より、末法の大導師上行菩薩に授けられてあるからである。

思ひ起せ、七百年前！鎌倉の街頭、降る來る刀杖瓦石の雨の中に、唯一人、身命を賭し、敢然立つて立正安國運動を起し、あれだけの大事業をなし給ふた日蓮聖人のことを思へ。

今日三百萬の信徒が打つて一丸となつて祖廟に額づき、大聖人を奉じて第二立正安國運動を起したならば一身は不淨なりとも、戒德は備はらずとも『如何でか祈りの叶はざるべき』である。若し宗門人の中に祖廟を忘れて自己の力によつて布教を成功せしめようとする者あらば私は言ふ「謬れり、退け」と、此の人は四菩薩出現の佛の金言に叛く者であり、例せば城者として城を破り」大上人の御意に叛する者である、かゝる人は速に法衣を脱して自決せよ。

異体同心事に示して曰く「殷の紂王は七十萬騎なれども同体異心なれば軍に敗けぬ、周の武王は八百人なれども異体同心なれば勝ちぬ、日蓮が一類は異体同心なれば人々少く候へども大事を成して一定法華經廣まりなんと疊え候。」（完）

蜜を得るには

結城一郎

「胡桃を食はんと欲せば、先づその殼を破らざるべからず」『蜜を得んと欲せば、蜂の刺す事を忍ばざるべからず』。

二つながら英國の諺ではあるが、此の諺の持つ意味は、我々に不勞所得は人間性の墮落なる事を喩してゐる。

胡桃が割れ、蜜が自然に流れて來るのを切株に腰懸て紫烟を吐きながら待つてゐる樣な暢氣な事の許された時代があつたればこそ今日の此の複雜限りない世代の樣相が現出したのではなかろうか。餌をつけずに釣する太公望は昔の寓話で現代には微塵の價値も認められない。自轉車を倒れさせぬ爲には走らせねばならない。成功するには不斷の倦ざる努力が必要である、時が凡てを解決すると考へるのは大きな誤りである。花の咲くのは確かに時ではあるが、花が咲き實が結ぶには、その根幹がなければならぬ、その根幹も常に手入れをしなければ、折角時が來つても花實を結ぶ事が出來ない、時運に相應するには日頃から實力を養成して置かねばならぬ、勞せずして功なしず。蓋し適言と言ふべきである。最善の結果を希ふのは人情の常ではあるが、此に眞劍な努力が並行しなかつたならば、それは求め得べくして求められなハ、儼たる生活の規準である。依之思此我々に與へられた當面の問題は止暇斷眠晝夜常精進の聖訓を如實に行藏に移す事より外にはない。